

いぶき

6

2008年 3月24日 発行



第1回国際シンポジウム会場でのプレゼンテーション、および、第6回国際学生シンポジウムで表彰された皆さんと学部審査員の先生方との記念撮影

目次

研究科長挨拶	西田 栄介	2
生命科学研究科シンポジウム報告	井上 丹	3
学会開催報告	米原 伸	4
新任教授紹介	南田 佳孝	4
魅力ある大学院教育イニシアティブの活動	松田 道行	5
生命科学英語コース	石川 冬木	6
海外研究室派遣	Ian Smith	7
海外学会派遣	平井 悠哉	8
サイトビジット	福中 彩子	9
学生フェスティバル開催	東島 仁	10
話題	小池 雅昭	10
人事異動	谷川 加奈	11
編集後記	仲間 美亮	12
	松井 妙	13
	駒井 春美	14
	藤田 春美	15
		16
		16

生命科学研究科長

西田 栄介



修士修了、博士修了おめでとうございます。これからも研究を続ける人と研究から離れる人がいると思いますが、どちらの人も生命科学研究科での研究生生活を将来に活かして欲しいと思います。研究には直接関わらなくなる人も、人生は、いわば研究そのものと言えなくもありませんから、研究生生活で得たものは必ずプラスになるだろうと信じてください。

今日は、原点に帰ろう、ということを書きます。僕自身は、小さい時から(中学生の初めのころくらいでしょうか)、よく知りもしないのに、自然科学の研究者になりたいと漠然と思っていました。結果的に、その希望はかなったことになりましたが、今になってみると、どうして研究者になりたいと思ったのか、研究者の何に魅力を感じていたのか、はっきりと思い出せません。身近に(たとえば家族に)、研究者がいたわけでもありません。おそらく、自由な感じと好きなことをやって生きていける感じ、そんなところでしょう。それでは、小さいころからの夢がかなった今、そのことを満喫しているだろうか、と自問してみました。というのも、ちょっと前、日本生化学会の会誌「生化学」で「研究者を楽しもう」というコラムを読んだからです。著者は、大学の教授と推察される人でしたが、学生との研究に関するディスカッションの楽しみや研究のアイデアを考える楽しみを述べていたように記憶しています。本当にそうだなあ、と感じたものです。さらに付け加えれば、その著者も述べていたかもしれませんが、ある頻度で新しい発見があり、それはごく小さな発見かもしれませんが、科学研究の醍醐味を感じることが出来る、そういう楽しみもあります。これが一番大きな楽しみかもしれません。

ちょっと話は変わるかもしれませんが、僕が大学院生のころ(だったと思うのですが)、ある雑誌の記事で、江橋節郎教授(当時東大教授；筋収縮のカルシウム調節研究を始め、日本の生命科学をリードした一人)が「科学は闘いである」と述べておられたのが印象に残っており、いまでも時々思い出します。ご自身が世界の科学者と闘って、研究のプライオリティーを得ることに苦労したことからの、我々後輩に対するメッセージだったのだと理解しているのですが、この「闘い」という言葉から、科学研究は競争である、と決め付けてしまうと良くないと感じます。確かに、先陣争いは激しく、一番乗りした人だけが評価される傾向があり、また競争心によって研究が進展するという側面もあることは事実でしょう。けれども、研究の過程で競争があまりに強調されると、研究の楽しみが失われ、結局のところやる気が沸いてこなくなってしまう。「楽しみ」と「競争」、このバランスは大変難しい問題です。「競争」をスパイスのように、上手に利用できれば最高です。昨日、村上春樹のエッセイを読んでいたら、「小説家という職業に……少なくとも僕にとってはということだけれど……勝ち負けはない。」という文がありました。村上春樹だからこそ、こう書けるということもあるかもしれませんが、やはり僕も「研究者という職業に勝ち負けはない。」と言いたいと思います。だから、原点に帰ろう、です。自由で好きなことを研究して、研究を楽しみ、そして「研究者を楽しみ」たいものです。是非皆さんも。

第9回生命科学研究科シンポジウム報告

統合生命科学専攻 遺伝子動態学分野

井上 丹

第9回目の開催を迎えた生命科学研究科シンポジウムは、例年より会期を早め2007年6月22-23日(金・土)に京大公会館で開催されました。このシンポジウムは、研究科に所属する全研究室が、最新のデータを中心に研究成果および今後の研究の展開について発表し、広く意見交換を行い、研究科のアクティビティーを一層高めるとともに、研究科内外の参加者の方に「生命科学研究の現在」についてご報告することを目的としております。今回は、「Biostudies」、「神経・発生」、「信号・ネットワーク」、「免疫」、「ナノバイオ」、「植物」、「機能調節・制御」の7つのセッションにおいて、2日間活発な発表、質疑が行われました。また、あたらしい試みとして、「Biostudies」と名付けたセッションをもうけてみました。このセッションでは、分野、研究内容を問わずに、他では見られない、今の「生命科学研究科」がもつ独自のカラーを全面に出すようこころがけ、演者の皆様による、大変すばらしい発表を楽しむことができたと思っております。今後も、このような企画を続けるかどうかについては、次年度以降の担当の方にご判断をいただきたいと思っております。

また、今年は、ポスターデザインを変更し、開催された時期である6月にちなんで緑を基調としたものを使用しました。例年同様、全国の大学、研究所に掲示をお願いし、本研究科、本学他部局はもちろん、広い地域より多くの方に参加していただきました。しかし、学内からの参加者数は例年通りでしたが、梅雨の中、天候に恵まれず、初日、学外からの参加者はやや減少しました。

例年通り、1日目のシンポジウム終了後には懇親会が開催され、学生、教職員の交流を中心に、わきあいあいの歓談が自主的な2次会も含め夜遅くまで行われたと聞いております。担当を終え、振り返りますと、生命科学研究科シンポジウムも回を重ね、新段階へのさらなる発展が期待されるようになってきたと思えます。このような本研究科のシンボルとなりつつあるシンポジウムが教職員、学生の交流・研鑽の場としてますます機能するよう、次回はさらに盛会となることを祈念して、第9回シンポジウムのご報告といたします。また、準備期間、会期における関係者の方々の絶大なご協力に心より感謝いたします。



第9回生命科学研究科シンポジウムポスター

第6回国際学生セミナーと国際シンポジウムの開催

実行委員長

米原 伸

生命科学研究科とウイルス研究所による21世紀COE拠点の活動として国際学生セミナーを毎年開催してきました。今年度は大学本部からの「研究推進のためのフォローアップ経費」と生命科学研究科が獲得している「魅力ある大学院教育イニシアティブ事業」の支援を得て、大学院学生が英語で研究発表を行う場として第6回国際学生セミナー開催し、新たな企画として若手教員が英語で研究発表を行う国際シンポジウムも同時に開催しました(表紙写真)。詳しい報告は、実行委員の南田さんが書いてくれたので読んでいただきたいと思います。なお、参加者総数は361名のほり、アンケート調査では回答者の88%と84.5%が、それぞれ国際学生セミナーと国際シンポジウムの来年の開催を希望する(「開催の必要はない」は、それぞれ0%と4%)という結果が得られました。

第6回国際学生セミナーならびに第1回国際シンポジウムの報告

実行委員 高次生命科学専攻 高次遺伝情報学分野 博士課程1回生

南田 佳孝

去る2008年3月5日に第1回国際シンポジウム、6日に第6回国際学生セミナーが芝蘭会館において開催されました。本学術集会は生命科学研究科とウイルス研究所の共同で行われ、両機関に所属する学生を中心とした14名の実行委員により企画運営されました。本年度より新たな試みとして開催された国際シンポジウムでは、若手教員の方を中心として13人に1人30分で各分野の興味深い先端研究をプレゼンテーションしていただきました。もちろん全て英語での発表でしたが、質疑応答では教員のみならず学生からも積極的に質問が出て熱のこもった議論が展開されました。コーヒープレイクの時に窓の外を見ると会場の熱気とは対照に雪がちらついており印象的でした。翌日同会場で開かれた国際学生セミナーでは、学生や若手研究者の方17人がオーラルプレゼンテーションを、47人がポスター発表を行いました。本セミナーにはオーラル発表の審査員として学内外から各分野において著名な11人の先生方に参加していただきました。審査員の中には英語のネイティブスピーカーの方も数名おられ英語ディスカッションがいつそう引き締まったものになりました。国際学生セミナーの発表も研究内容やプレゼンテーションの質が高く、前日の国際シンポジウムにひけをとらないとさえ感じるものも多くありました。また、ポスター会場では多くの教員の方や学生が積極的に議論に参加して活気を帯びた場となり、非常に充実した時間を過ごすことができました。研究発表が終了した後は懇親会が行われ、その場でオーラル発表とポスター発表の優秀者がそれぞれ表彰されました。懇親会では普段あまり話す機会のない人達と知り合い、研究やそれ以外のことで盛り上がる事ができたので友好関係を築く場として良いものなっただと感じています。本国際シンポジウムと国際学生セミナーは全て英語で行われました。研究内容を英語で発表し、議論することは国際的に活躍することができる研究者になるためにもとても大切なことですし、自分の研究内容を論理的に再考するという意味でも非常に意義のあることだと感じました。また、まだ英語がそれほど得意でない学生にとっても、英語での発表に刺激を受けて日々の学習意欲を高めるのに役立ったのではないかと考えています。来年度以降もこのような機会が継続し、より良いものになっていくことを願っています。最後に、今回のシンポジウムとセミナーの開催運営にご協力いただいたすべての方々に感謝したいと思います。

新任教授紹介



ご挨拶

高次生命科学専攻 生体制御学分野

松田道行

平成19年4月1日付けで、医学研究科病態生物医学より、湊長博教授の後任として高次生命科学専攻生体制御学分野に着任いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は医学部病理学教室で癌の研究を開始し、ロックフェラー大学の花房秀三郎教授の研究室に留学したのを契機に、細胞内情報伝達の研究を始めました。蛋白間の特異的結合を指標とする細胞内情報伝達ネットワークの構築という世界的な研究の流れの中に身をおき、Rap1 制御因子群や DOCK ファミリー分子群などの発見をすることができました。そして、そろそろこれらの情報をシステムとして統合する研究を始める頃だろうと思ったのは世紀が変わろうとする頃です。そのためには何が必要かと考え、それは生細胞で情報伝達を可視化する技術だという答に至りました。そこで FRET プローブの開発し、現在は蛍光イメージングを中心とした研究を展開しています。最近、ようやく本来の目標である細胞内情報伝達系のシステム論的解析の研究が端緒につきました。私は、自分の専門に捕らわれず、必要だと思うこと、やりたいことには何でも自分で手を出すということが大事だと信じています。あれやってみたらおもしろいとか、これ使ったらどうなるだろうという好奇心を満たすことができなかつたら研究を続けてもつまらない。学生諸君のそのような好奇心を大切にしながら、研究室の発展を目指していきたいと思えます。よろしくご挨拶申し上げます。

しなやかな「生命科学キャリアディベロップメント」

「魅力」取り組み責任者

石川 冬木

生命科学を含めた我が国の科学をとりまく環境は、過去10年あまりの間に大きく変化している。国の科学技術予算が増え、大型の「競争的研究資金」が公募される一方で、大学運営費交付金は年々減少、「競争的研究資金」に漏れた研究者は、日々の研究費にも欠く状態である。また、ポスドクをはじめとする若手任期付き研究ポストは増えている一方で、独立研究者のポストは依然として少ない。さらに、「目で見える」成果、すなわち有力誌への論文掲載や応用間近な研究成果が、あらかじめ定められた期限内に要求される。このような「競争的な」状況の是非はここでは議論しないが、ストレスの多い研究環境になりつつあることは明らかである。このような状況下、若い学生諸君、若い研究者諸君はどうすればいいのであろうか？「しなやか」になるべきである。

研究上の競争はもちろん昔からあった。私が尊敬する岡崎令治先生は、生物学上の「essentialな問題」を解決すべく種々の困難を克服して岡崎フラグメントの存在を証明された。また京大教授でもあった木原 均先生は、「地球の歴史は地殻の層にあり、全ての生物の歴史は染色体に刻まれている」との信念のもと、さまざまな立場で染色体研究を一貫して行われた。これらの先輩諸賢が状況の変化にもかかわらず、「競争」に勝ったのは、特定の「お気に入り研究」を越えた学問上の信念があったからに違いない。もし研究者が、自分のお気に入りの技術、遺伝子、蛋白質、モデル生物等に固執するのであれば、状況がそのような研究を許さなくなった場合に、直ちに研究活動は立ち往生をするであろう。信念があって、人ははじめて「しなやか」になれる。

学問上の信念は、個々の研究データから生まれるものではなく、日々、研究者として「何が重要なのか」を考えてきたか、その来歴によって決定される。その際、若い学生諸君にとって以下の諸点が重要である。その時々最先端の科学を知る努力は、後追いをするためでは決してなく、真にすばらしい科学の質とはなにかを知るために重要なことである。信念にはオリジナリティーが必要であるが、科学である以上、一般性を持つ必要がある。自分のアイデアが自分勝手なこじつけではなく、倫理性をもった科学として通用するものにするためには、市民や専門外の研究者をふくめた他者にそれを声に出して説明し、自己点検をする必要がある。また、科学的研究とは、大学や研究所、企業で行う実験を主体とした研究活動だけを指すのではなく、広く社会で科学を演繹することも含まれる。我が国では、残念ながら、企業、政界、官界、マスコミあるいは国際機関等で幅広い見識と合理性をもって問題解決できる人材はきわめて少ない。これらの領域は、本研究科卒業生にとって今後社会的ニーズが高まる重要なキャリアパスとなろう。最後に、そのような信念とそれに基づく成果を、世界の「公用語」である英語を使って自己表現する能力も重要である。このような訓練を受けた若い学生諸君は、卒業後に自分の信念に従って、数々の「競争」をしなやかに生き延び、ロバスタなキャリアディベロップメントを達成するであろう。「魅力ある大学院教育」では、以上の諸点に注意をしながら大学院教育の改革を図ってきた。

早いもので、「魅力ある大学院教育」は、平成19年度をもって終了する。この事業は、「魅力」特任助教を含めた研究科全教員、事務や研究室秘書の方々、講義をよくするために一緒に考えてくれた学生諸君の多大な協力があって初めて可能となったものである。特に、「魅力4人組」の仲間である垣塚 彰教授、河内孝之教授、加藤和人准教授、および「生命科学英語コース」を担当されたIan Smith博士には、学生講義を少しでも改善するために献身的なご努力をいただいた。もし本事業が若い学生諸君を少しでも勇気づけることができたとしたら、それは我々にとって大きな喜びである。

Science in English : Speaking of Eisosomes...

生命科学英語コース担当 奈良先端大(NAIST)

Ian Smith

When I first came to Japan, I could barely speak Japanese. Any improvement during the subsequent five years has been due to the patience and persistence of my wonderful teacher: I have a weekly one-to-one lesson at her home near Nara, but I think I must be her laziest student. One thing I have learned, however - both from my own efforts to study Japanese and from interactions with my students at Nara Institute of Science and Technology (NAIST) - is that classes with more than about four students are not ideal environments in which to learn a foreign language in any depth.

For that reason, I was very excited when Professor Ishikawa told me two years ago about his ideas for 'Academic English Discussion' courses, to be given to Life Sciences graduate students at Kyoto University, and invited me to teach some of them. I had not taught classes like these before, in which groups of three students would have the opportunity to describe and discuss, in technical English, research papers that were of relevance or of interest to them.

I use the word 'teach', but in many ways I feel that I am learning as much as the students. A few days before each class, one student selects a paper and circulates it electronically to the other three participants. Typically, these are 'big' papers, often from recent issues of *Nature* or *Cell*. During the class, my role feels like that of a 'guide' rather than of a 'teacher'. Some of the technical vocabulary we encounter is no more familiar to me than it is to the students; one word that I remember pondering how to pronounce was 'eisosome', which in fact had not existed before the authors of the paper introduced it into their study of yeast endocytosis. So, although the principal focus of the class is linguistic, I would say that we are all, as an unexpected side-effect, learning a lot of biology at the same time.

The students, like my Japanese teacher, are wonderful - and that is not an adjective that I use lightly. Preparing for the classes in which they are presenting requires a great deal of time, but they always manage to find it somehow and to give clear, logically coherent, and balanced descriptions of difficult topics. Among my tasks are to check minor pronunciation questions; to make suggestions about how, in words, to indicate specific areas, or to 'navigate' from place to place, within a complex Figure; and to make sure that everyone is following the story, or that they are asking questions if they are not.

This last point touches on one of the main objectives of these courses: to give the students practice in asking and answering questions about a scientific presentation. Of course, the ultimate goal is for them to become able, and confident enough, to ask and answer questions at scientific conferences, so that they can become strong and active competitors in the international scientific arena, where - whether we like it or not - English is a critical tool, a key to success. If one's native language is as remote from English as is Japanese, attaining such mastery requires many years of study and practice. I hope that the students feel, as I do, that by participating in these courses they have taken an important step on this long and arduous journey.

They, as well as any readers who are struggling with scientific English, need to sustain and maximize their contact with English beyond the classroom. As a practical step in this direction, I would recommend, for example, that you seize opportunities to attend seminars and lectures that are given by overseas scholars visiting Kyoto, whether or not the topic is directly related to your own field of study. In many cases, such presentations will be made by people, like you, whose native language is not English. You can therefore train your ears and mind to understand a wide range of accents and speaking styles; this will gradually broaden your listening skills, and indirectly strengthen your speaking skills.

This year, I shall follow my own advice, and attend some seminars and lectures at NAIST - in Japanese.

ダンディー

統合生命科学専攻 分子情報解析学分野 修士課程1回生

平井 悠哉

私は8月下旬から約2週間、スコットランドのダンディー市にあるダンディー大学を訪問した。ある方の「若いうちから海外を経験せなあかんのや」という信念を浴びる中、運よく研究科の「魅力」の研究室派遣プログラムの奨学生に採択された。ダンディー大学(<http://www.dundee.ac.uk>)

には、「School of Life Sciences」という部局があり、生命科学に関しては、オックスフォード大学やケンブリッジ大学について活発な研究がおこなわれている。その中に、「Gene Regulation and Expression」という部門がある。総勢13名のPIからなる部門で、DNA複製や修復、細胞周期や染色体分配のメカニズムに焦点を当てた研究が盛んに行われている。部門長は「核構造とRNAプロセッシング」をテーマとする Angus Lamond 教授であり、私の所属する研究室の共同研究者である「転写・複製におけるクロマチンリモデリング」の Tom Owen-Hughes 教授や「染色体分配機構」で有名な日本人の Tomoyuki Tanaka 准教授がおられる。



ダンディーの風景

私は Tom Owen-Hughes 教授の研究室を訪問先に選んだ。しかし彼の勧めにより、実際には Lamond 研究室で実験を行った。彼らは2002年に核小体タンパク質の網羅的プロテオーム解析を発表したことで有名であり、またその他の核内構造体にも解析の目を向けたり、それらの核内タンパク質と多くの疾病との関わりを解析したりと、私の現在の研究テーマに、より近かったからである。

Prof. Lamond、その人柄は温厚であり、大のコーヒー好き。使い終わったコーヒーメーカーの掃除をしなかったものは翌日デスクやらベンチやらがなくなるらしい。とにかく毎日忙しきで一杯、いろいろなところに飛び回っているという感じであった。

研究室員の方々は全員ポスドク、つまり学生はいない。様々な国から集まったポスドクの中には、Motoharu Ono 博士という日本の方もおられた。英国の大学での職をさがしておられる、実に前向きな方である。実は私の子守をしていただいたのがその方で、私が2週間なんとか生きていたのはその人のおかげである。ここでは日本とはかなり研究に対する姿勢が違うと感じた。この研究室のある方いわく、「研究漬けの生活をしていたら確かに結果は早く出るかもしれない。でも時間的なことかというと、そうでない人との差はせいぜい2、3年である。研究自体が人生そのものであるよりも、研究はあくまで人生の一部であるほうがはるかによい。」こういった中から独創的で優秀な研究成果がどんどんでてくる。そのあたりがすばらしいと思った。スコットランドに来た甲斐があった。

研究室の雰囲気であるが、この Gene Regulation and Expression の部門全体が一つの研究室といった感じで、一つ一つの研究室が独立しているといった雰囲気は全くない。何かほしいものがあれば気軽に隣の研究室に借りにいける、といった感じであった。私の今所属しているところとはずいぶんと雰囲気が違って新鮮であった。この部門では、ほとんどの研究者が FRAT、FRETをはじめ Live cell イメージングをしており、建物の地下には共有のテラバイトの解析用コンピューターがある。

私が過ごした Lamond 研究室での生活は、基本的には実験技術の習得とデータの整理だけであつたので特に記述することはないが、一度 Prof. Lamond や Dr. Tom Owen-Hughes (写真手前) たちの前でセミナーを行った。なんせ大御所の前なので、どうなることやらと少し心配していたが、皆さんよく我慢して僕のしどろもどろの英語を聞いてくださり、しかも沢山の有用なアドバイスまでして頂いた。



発表直前……立っているのが筆者

スコットランドでの経験は私の人生において、大きなものになるのは間違いない。様々な価値観や文化、また研究室の雰囲気に触れることが出来て本当によかった。「魅力」の活動の中に研究室派遣を支援してくれるものがあって幸運であつた。またこのような機会を与えてくださった竹安先生、Dr. Tom Owen-Hughes、Prof. Angus Lamond、そして Lamond 研究室の方々に、深く感謝いたします。

アメリカ合衆国、ボストンでの海外研修

統合生命科学専攻 生体情報応答学分野 博士課程 3 年生

福 中 彩 子

新緑の色増す 5 月下旬から一ヶ月間、歴史と先端研究の街ボストンで研究生活を送る機会に恵まれました。この海外研修は、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の支援を受けました。所属する研究室以外で実験を行うことがなかった私にとって、初めての人たちと一緒に自分がどのくらい出来るかを試す良い機会でありました。その一方で、初めての一人暮らしを海外で行うことに、言葉や生活などの不安もありました。

共同研究を行った、ハーバード大学の Robin Reed 研究室は、RNA の成熟機構研究では毎年優れた業績を上げている研究室です。Reed 研究室には多国籍のポスドクがおり、彼らに実験を教えてもらいながら研究を進めていく過程で様々なことを学びました。まず、今回の海外派遣の目的である、新しい実験手法を習得することができました。次いで、それまで行っていた実験操作にどのような意味があるのかも一度考え直す非常に良い機会となりました。また、得られた実験結果に対して、流暢とは言えない英語で彼らとどうにか議論できたことは、私にとって大きな自信となりました。遠くない将来、私も他の人の実験結果に対して、共に議論していけるような存在になりたい、と強く感じました。

今回の海外派遣に際して、21 世紀 COE プログラムの英会話の授業を受講していた御陰で、不安を感じていた海外生活でも物怖じすることなく過ごすことが出来ましたし、ポスドクの人たちと議論して有意義な研修生活を送れました。帰国後、研究が思うように進まない時には、様々な人々の支えで今回の海外派遣の機会が与えられたことを思い出し、少しでもその恩に報いるよう成長できればと、日々励んでおります。

最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えて下さった生命科学研究所の先生方や、派遣を受け入れて下さった Reed 教授には感謝の気持ちで一杯です。どうもありがとうございました。

American Society of Human Genetics Annual Meeting 2007 にて

高次生命科学専攻 生命文化学分野 博士課程1回生

東 島 仁

アメリカ合衆国 San Diego (California) で開催された American Society of Human Genetics (ASHG) Annual Meeting 2007 で発表してきました。「魅力ある大学院教育イニシアティブ」事業(文部科学省)、「生命科学キャリアディベロップメント」による学会派遣です。会員の約7%が主な研究分野に Ethical, Legal and Social Issues (ELSI) を挙げる ASHG だけあって、ポスターセッションには ELSI in Genetics という、私、そして私の所属する加藤和人研究室が専門とする(日本では珍しい)テーマ枠が。口頭発表や講演でも、近年飛躍的に広がった Genome Wide Association Studies 関連のデータベースにおける個人情報保護とデータシェアの問題や遺伝カウンセリング、遺伝学教育など、遺伝学の ELSI 面に関する発表や言及が多く、議論が弾みました。また若手研究者対象のランチセッションで、ELSI 研究者であり ASHG 会長でもある W. Burke 氏に、ELSI 研究を続ける心構えを直接伺う機会に恵まれるなど実り多い一週間でした。魅力ある大学院教育イニシアティブ事業に感謝します。

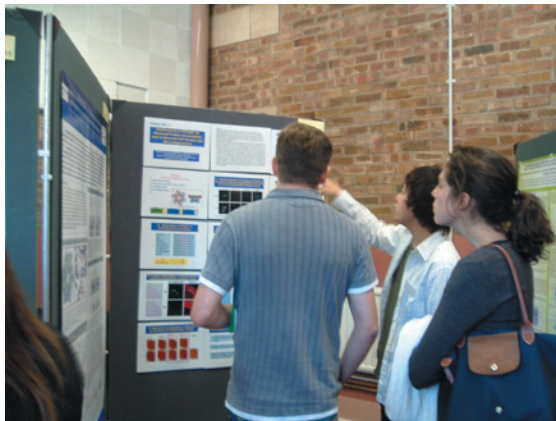
7th International Meeting on AAA Proteins にて

高次生命科学専攻 高次生体統御学分野 博士課程3回生

小 池 雅 昭

今回、2007年9月にイギリスで開かれた国際学会において発表する機会に恵まれ、文部科学省が支援する「魅力ある大学院教育」の活動の一端として海外学会派遣の支援を本研究科のほうにしていたいただいた。約1週間、垣塚先生と同室で寝泊まりするといった、誰もが羨むような環境(?)で、非常に刺激的な日々を過ごすことができた。学会のほうは、当初不安で仕方なかったが、私のつたない英語力にも関わらず、多くの方と議論することができ、アイデアをいただいたり、学ぶことも大変多かった。一方で、私が進めている研究も海外の研究者と比べて、全然負けていないと自信を持っていたことも事実だ。また、海外の研究者は、非常に積極的で好奇心旺盛、心から研究(サイエンス)を楽しんでいるといった印象を受けた。何よりも印象的だったのは、(かなりのご高齢で今にも倒れそうな…)プロテアソームの発見者 Goldberg 博士がポスター会場が一番最後まで、全員のポスターをくまなくチェックされていたことだ。いくつになってもサイエンスを楽しむ心と好奇心を持ち合わせている、そういった姿勢を見習いたいと強く思ったことを覚えている。

私自身、今回の派遣を通じて、様々な研究者と出会うことができ、サイエンスの面白さを再認識することができた。今後、日本を代表するような研究者に少しでも近づけるよう、垣塚先生をはじめ、多くの方の叱咤激励を受け日々邁進していきたいと考えています。最後に、このような機会を与えてくださった生命科学専攻の皆様に感謝します。

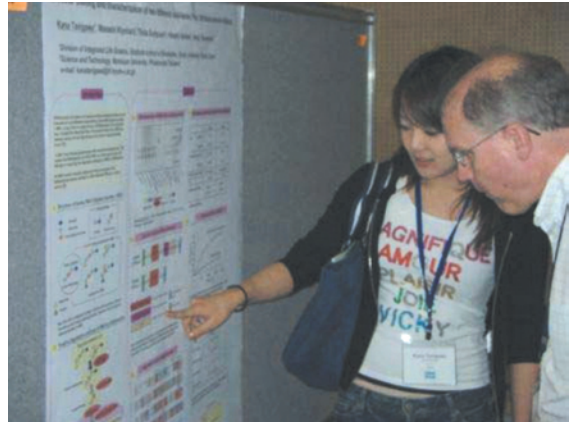


国際学会発表を終えて

統合生命科学専攻 分子応答機構学分野 修士課程2回生

谷川 加奈

私は「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「生命科学キャリアディベロップメント」のプログラムのひとつである「実践的生命科学英語コミュニケーションプログラム」の支援を受けて7月15日から20日まで、オーストラリアで行われた「XIX International Symposium on Glycoconjugates (GLYCO-19)」に参加し、ポスター発表を行ってきました。本学会は複合糖質を研究する世界中の研究者が集まり2年に一度開催される学会です。自分の研究成果をアピールし、そのレベルを認識すると同時に、著名な方々の講演を聞き知見を広めることができました。英語でのディスカッションは初めての経験で自分の伝えたいことを表現することに苦労しましたが、良い経験になりました。今後、グローバルな視野で益々研究に励みたいと思います。修士課程という早い段階でこのような機会を与えて頂いたことに感謝いたします。



「サントリー研究所を訪問して」

高次生命科学専攻 信号伝達動態学分野 博士課程2回生

仲間美奈

先日、サイトビジットの一環として、サントリー研究所を訪問する機会をいただきました。この派遣では、企業の方の研究姿勢や目標を伺うことを目的とし、研究員の方の生の声を聞き、現場をじっくり見学することができました。

前半は、主に田中隆治技監ご自身のこれまでの研究人生を振り返っての講演と質疑応答が行われました。田中氏の講演では、バイオテクノロジーの発展とご自身の研究の着眼点とが絡んでいて、先見の明がおありなのだと思います。「研究者として成功するには、自分自身で勉強を怠らず、人との連携を大切に、一つのことを長く続けるうちにオリジナリティを見出す」というメッセージが印象に残っております。また、田中氏がお話してくださるとき、顔をずっと聴衆の方へ向けていて、語りかけるようなプレゼンテーションでした。このような発表の姿勢は、自分の意図を相手に理解してもらうために、企業でもアカデミアでも必要なことである、と改めて感じました。

後半は、研究所内の実験スペースや植物の培養室などに案内していただき、サントリー社で開発された有名な青いバラを実際に見ることができました。青いバラ開発にまつわる秘話や、女性研究員の方の企業でのキャリア形成のお話は、個人的に興味深く思っていたため沢山の質問をさせていただきました。

全体を通して、今回の派遣により、研究者としての在り方を深く考えることができました。企業と大学での研究の違いについて、企業の研究員の方の考えを伺ったことを参考にします。その上で自分はどうするのか、現在と未来を見つめたいと思います。この機会を与えてくださった関係者の皆様に感謝いたします。



「理化学研究所脳科学総合センター サイトビジット」を終えて

高次生命科学専攻 高次脳機能学分野 博士課程1回生

松井 亮介

平成19年12月21日、魅力ある大学院教育イニシアティブの一環として埼玉県和光市の理化学研究所脳科学総合センター(BSI)へのサイトビジットが行われました。BSIは池袋から電車で12分程揺られた後、閑静な住宅地を15分ほど歩くと到着します。広大な敷地の和光研究所内に4つの研究棟を有し、200名以上の研究者が所属している研究所です。サイトビジットへは博士課程に所属する5名の学生が参加し、ユニットリーダーの先生からBSIの概要を含む講演を伺うと共に、内部の研究支援を行っているリサーチリソースセンターを見学させて頂きました。その後、参加者の希望する幾つかの研究室の訪問を行い、先生や研究員の方々から直接お話を伺いました。

今回のサイトビジットを通じて、目標でもある研究者の方々に、どのような環境でどのようなことを考えて研究をされているのかを直接伺えたことは、刺激的であっただけではなく、これまでは漠然としていた将来の進路を考える上での力強い道しるべになったものと思います。

最後になりましたが、このようなすばらしい機会を支えてくださった先生方、参加者の皆さん、そして「魅力ある大学院教育イニシアティブ」プログラムに感謝いたします。



第3回学生フェスティバルを終えて

統合生命科学専攻 信号伝達動態学分野 博士課程1年生

駒井 妙

平成19年10月4日、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて、魅力ある大学院教育イニシアティブ「生命科学キャリアディベロップメント」の一環として、第3回学生フェスティバルが開催されました。

学生フェスティバルは研究発表を通じて学生間の交流を深めたいという願いから、学生有志によって一昨年に立ち上げられました。今回で3回目を迎え、生命科学研究科の様々な分野に所属する修士課程1年から博士後期課程2年の学生15名の実行委員で企画運営を行いました。第3回学生フェスティバルでは「分野を超えた交流」をメインコンセプトに掲げ、普段は馴染みの少ない分野の研究発表についても議論を楽しむことができる会を目指しました。要旨集には新たにイントロダクション欄を設け、他分野の人に向けて発表者自らの文章で研究の背景や魅力を伝えてもらいました。また第2回学生フェスティバルで好評を得た、発展過程にある研究を発表する場である「萌芽研究発表」や参加者が興味のある実験技術と発表者が使用している実験技術を結び付けるための「実験技術を通じた交流」もさらなる工夫を加えて実施しました。

当日は午前中から12名の学生が口頭発表を行いました。幅広い分野にわたる発表内容となりましたが学生間で活発な質疑・応答が行われ、分野を超えた交流の楽しさや重要性を体感できる時間となりました。午後には51題のポスター発表を行いました。会場内は至る所で熱い議論が交わされ、活気に溢れていました。2時間という発表時間はあまりに短く、会終了後に行われた懇親会では引き続き料理や飲み物を片手にポスター前で議論を楽しむ学生の姿が見受けられました。

第3回学生フェスティバルのポスターは様々な分野の研究がネット状に繋がり、それらが大きな輪となって広がっていく様子をイメージしています。今回は200名を超える参加者がありました。ポスターイメージにあるように本会がきっかけとなって、参加者の方々の研究に新たな相互作用が生まれ、それを通じて研究がさらに発展していくことを期待しています。

最後になりましたが、第3回学生フェスティバルにご参加くださった皆様、開催のためにご支援・ご協力頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。



第3回学生フェスティバルポスター



学生向けホームページリニューアル

高次生命科学専攻 生体防御学分野 博士課程1回生

藤田 春美

「学生の心をとらえて放さない、研究科の学生向けサイトを製作したいのですが、協力していただけませんか？」

細胞認識学の上村匡教授からこのようなご連絡を頂いたのは8月上旬のことでした。副指導教員をお願いしている関係で教授とは面識があったのですが、サイエンス以外でご一緒させて頂く機会があるとは思ってもいませんでした。お話を伺うと、上村教授は生命科学専攻 HP 委員会の委員長でもあり、学生向けの専用情報サイトを製作する要請を研究科内から受けて尽力されているとのこと。学生の心を掴む魅力的なサイトをデザインするために、学生の率直な意見を仰ぎたいのだそうです。この連絡を頂いた当時、研究科の連絡サイトは学生だけでなく教職員を含む全メンバーを対象にしたものであり、サイト構造も複雑で利用しづらく感じていました。新しく学生向けサイトが出来るならば是非自分も利用したい。そのために自分に役立てることがあるなら、と私は依頼を承諾し、サイトデザイン案の打ち合わせに参加させて頂くことになりました。

打ち合わせは、HP 委員会の先生方と情報担当の職員の皆さんに学生数人が混じる形で行われました。まずはトップイラストの検討から。これはサイトの全体的な雰囲気を左右する重要トピックです。プロの手による魅力的な候補イラストをもとに意見を交換し、明るく広がりを感じられると学生陣に好評だった現在の案を採用することになりました。続いて具体的なサイトデザインについて、研究科 HP や他大学のサイトを参考にしつつ、「ユーザビリティ」を念頭に置いた議論を行いました。例えば、情報の所在を明確にするには？無駄な移動をなくするにはどうすればいいか？どのような機能が必要か？…など。学生達はやはり web 世界に精通しているだけあって活発な議論が展開されました。たまには研究を離れて初顔合わせの人たちと議論するのも新鮮もおもしろいものです。私もいくつか意見を述べてみましたが、役に立てたでしょうか？

打ち合わせ後もデザイン改定案への意見をメールで遣り取りし、10月1日に完成型が披露されました (<http://www.lif.kyoto-u.ac.jp/st/>)。打ち合わせでの我々の意見が反映された、機能的で使い心地の良いサイトになっています。連絡事項は項目ごとに分類され、それぞれのページがトップから直接リンクされているため、必要情報を簡単に見つけられます。内容は講義、奨学金など学生生活に必須の情報は勿論のこと、就活を考えている人の為の求人情報も豊富です。カレンダーはまさに生命の学生専用という感じで非常に充実しており、講義やセミナー情報、研究科のイベントだけでなく、提出物等の重要な締め切り日も掲載されているのが有り難いです。また携帯サイトも用意されていて、近日中に開かれるセミナーや講義の時間割を自宅や出先などから手軽に確認するのに便利です。まだ使用したことのない院生の皆様も、是非、この文章を読んだのを機会にこのサイトを訪問してみてください。

こうやって大学院環境が整えられていくのは私たち学生にとって大変有り難いことですし、その為には微力ながら力添えができたことは貴重な体験だったと思います。最近「魅力ある大学院教育 イニシアティブ」への採択に伴い多彩なセミナーが開催され、講義もさらに充実してきました。これらの機会をおおいに活用し、よりアクティブな研究科に発展していけたらと思います。



教員人事異動

平成20年3月15日現在

年月日	異動内容	所 属 ・ 官 職 等		氏 名
		新	旧	
19. 2. 1	採 用	京都大学研究員 (JSPS 助手(特任))		大庭良介
19. 2.28	転出(辞職)	米国 テキサス大学 サウスタンメディカルセンター 研究員	多細胞体構築学講座 シグナル伝達学分野 助手	福田 真
19. 3.31	辞 職	多細胞体構築学講座 シグナル伝達学分野 研究員	多細胞体構築学講座 シグナル伝達学分野 助手	日下部 杜央
19. 3.31	定年(協力講座)	慶應義塾大学 医学部 総合医科学研究センター 特別研究教授	高次生体機能学講座 生体動態制御学分野 教授	下遠野 邦忠
19. 3.31	任期満了	理化学研究所 発生再生科学総合研究センター センター長	体制制御学講座 分子病態学分野 非常勤講師(客員教授)	竹市雅俊
19. 3.31	任期満了	高次生体統御学講座 高次生体統御学分野 研究員	京都大学研究員 (JSPS 助手(特任))	安田邦彦
19. 4. 1	配 置 換	大学院医学研究科 医学専攻感染・免疫学講座 教授	認知情報学講座 生体制御学分野 教授	湊 長博
19. 4. 1	〃	大学院医学研究科 医学専攻感染・免疫学講座 准教授	認知情報学講座 生体制御学分野 助教授	服部雅一
19. 4. 1	〃	大学院医学研究科 医学専攻感染・免疫学講座 助教	認知情報学講座 生体制御学分野 助手	田中義正
19. 4. 1	〃	認知情報学講座 生体制御学分野 教授	大学院医学研究科 基礎病体学講座 教授	松田道行
19. 4. 1	〃	認知情報学講座 生体制御学分野 講師	大学院医学研究科 基礎病体学講座 講師	中村岳史
19. 4. 1	〃	認知情報学講座 生体制御学分野 助教	大学院医学研究科 基礎病体学講座 助手	清川悦子
19. 4. 1	採 用	高次応答制御学講座 生体システム学分野 助教		生沼 泉
19. 4. 1	配置換(協力講座)	ウイルス研究所 細胞生物学研究部門 准教授	高次生体機能学講座 高次細胞制御学分野 助教授	村上洋太
19. 4. 1	連携併任	体制制御学講座 分子病態学分野 非常勤講師(客員教授)	(理化学研究所 発生再生科学総合研究センター グループディレクター)	松崎文雄
19. 6. 1	採 用	高次応答制御学講座 システム機能学分野 助教		内藤裕子
19. 8.31	転出(辞職)	京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科 教授	応用生物機構学講座 微生物細胞機構学分野 准教授	鈴木秀之
19. 9. 1	配 置 換	環境応答制御学講座 分子代謝制御学分野 助教	大学院理学研究科 分子植物科学分野 助教	阿部光知
19. 9.30	転出(辞職)	筑波大学 大学院人間総合科学研究科 助教	京都大学研究員 (JSPS 助手(特任))	大庭良介
19.10. 1	採 用	京都大学研究員 (JSPS 助教(特任))		舟山 亮
19.10.31	転出(辞職)	名古屋大学 大学院生命農学研究科 教授	環境応答制御学講座 分子代謝制御学分野 准教授	畑 信吾
19.11. 1	採 用	多細胞体構築学講座 シグナル伝達学分野 助教	多細胞体構築学講座 シグナル伝達学分野 研究員	日下部 杜央
19.11.30	転出(辞職)	東北大学 大学院医学系研究科 創生応用医学研究センター 助教	京都大学研究員 (JSPS 助手(特任))	舟山 亮
19.12. 1	採 用	認知情報学講座 高次脳機能学分野 助教	理化学研究所 発生再生科学総合研究センター 研究員	安部 健太郎
19.12. 1	採 用	京都大学研究員 (JSPS 助教(特任))		齊藤基輝
20. 1. 1	昇 任	環境応答制御学講座 分子情報解析学分野 助教	環境応答制御学講座 分子情報解析学分野 教務職員	日詰光治

編集後記

本年度は魅力の最終年でもあり、その活動をなぞる形としました。いぶきは研究科のホームページから比較的簡単にダウンロードできるので、これから生命科学研究所の院試を受けようと考えている人にとっても、いろいろと院生の活動が見えてくる様な作りの号が一度はあって良いかも、との思惑とも一致し、今年度は、なるべく多くの院生のみんなにも執筆してもらおう方向で行きました。無事、本号が発行できましたのも、各先生方をはじめ、執筆者の皆様のご協力のたまものであり、ここに深く感謝致します。

(高次・システム機能学分野 竹松 弘)